

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成23年11月9日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 医学研究科

職 名・学 年 博士課程3年

氏 名 森 島 敏 隆

助 成 の 種 類	平成23年度 ・ 国際研究集会発表助成		
研 究 集 会 名	(英文) The 33rd Annual Meeting of the Society for Medical Decision Making (和文) 第33回医療決断分析学会年次総会		
発 表 題 目	(英文) Cost-effectiveness of omalizumab for the treatment of adults with moderate to severe persistent asthma: results from a randomized controlled trial in Japan (和文) 中等度～重度喘息のための治療薬・オマリズマブの費用効果分析—日本で施行されたアジア初の臨床試験のデータをもとに分析した結果—		
開 催 場 所	アメリカ合衆国・イリノイ州・シカゴ市		
渡 航 期 間	平成23年10月22日 ～ 平成23年10月28日		
成 果 の 概 要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()		
会 計 報 告	交付を受けた助成金額	200,000 円	
	使用した助成金額	200,000 円	
	返納すべき助成金額	0 円	
	助成金の使途内訳	参加登録料 \$535 (41,842円)	
		(上記内訳:総会登録料 \$235x78.179(¥/\$))	
		(上記内訳:セミナー等参加料 \$300x78.234(¥/\$))	
		航空券(往復) 112,240円	
宿泊料 1泊\$183.49 × 5泊 = \$917.45 (70821円)			
合計 224,903円 に充当			

成果の概要

私は平成 23 年度国際研究集会発表助成（2 期）採択者として、平成 23 年 10 月 22 日から 27 日にかけてアメリカ合衆国・シカゴ市で開催された第 33 回医療意思決定学会年次総会に出席し、中等度～重度喘息のための治療薬・オマリズマブの費用効果分析の研究について口頭で発表した。主な成果は以下のものである。

- ・私の研究に関して、適切で鋭い指摘をしてもらった。
- ・外国人研究者と交流する中で、何人かの知り合いができた。
- ・国際学会でより多くのものであるためにさらなる英語力が必要であると実感した。
- ・発表の準備の段階において、英語プレゼンテーションの方法を学んだ。

学会に参加して

北米・欧州を含む 30 カ国前後から 500 人以上の参加があった。参加者の主な職種は医学研究者、社会科学研究者、医療従事者、医療機関管理者、企業関係者、財団関係者、行政機関関係者である。医療意思決定学会（The Society for Medical Decision Making。以下、SMDM と略す）は医療意思の決断分析に関する学術研究をする研究者たちの世界随一の学術集会である。医療意思決定分析とは、さまざまな不確実性を有する医療行為において、どの医療行為を選択することが最も適切であると決断するのを手助けする。具体的に説明すると、多くの臨床場面において医療行為の選択肢は複数存在する。そしてどの医療行為を選択してもその医療行為の後には健康上の利益・不利益が出現しうる。そこでは健康上の利益の期待値が最大となる医療行為を選択することが最も適切である。医療意思決定分析では、複雑な臨床事象を適切なモデルにあてはめ、そのモデルに様々な知見を統合する作業が必要となる。それらの作業の方法論を研究したり、その方法論を応用して具体的な臨床場面においての最良の選択肢を探る研究をする学術成果を発表する集会である。私は健康上の利益だけでなく経済的な費用を加味した決断分析である、費用対効果分析を研究テーマとしている。つまり、ある一定の健康上の利益を得るためにどの医療行為を選択することが最も安上がりであるか、という研究である。医療の分野において費用対効果を重視する米国・欧州において、そして米国・欧州の研究者を中心に構成する SMDM において、費用対効果分析は非常に大きな分野である。

5 日間の集会において、様々な国の人と話した。そして反対に日本人とは数人しか出会わなかった。京都大学から 1 人で参加して、周囲がほぼ全員外国人であるという状況は私にとって生まれて初めての状況であり、緊張の連続を強いられた。しかしその中でも何とか外国人とコミュニケーションしていけること、交流すれば何らかのリターンを得られること、そして国際的な場面でより多くのものであるためにはやはり英語力がもっと必要であることを実感した。

研究発表

25 日午前中に自分の研究を口頭で発表した。「中等度～重度喘息のための治療薬・オマリズマブの費用効果分析—日本で施行されたアジア初の臨床試験のデータをもとに分析した結果—」というタイトルである。オマリズマブという高額な薬剤が費用効果的であるのかどうかを、臨床効果データと医療費データを統合して研究したものである。

発表 10 分、質疑応答 5 分で行われた。しかしあまり時間管理に厳格な学会ではなくて大まかな

時間枠で進行していたので、発表は早口でしゃべる必要もなくゆっくり話すことができた。発表はメモをときどき見つつ、無難に終えた。質疑応答では、さすがは医療意思決定分析の研究の本場であった。SMDM の費用対効果研究分野の重鎮ともいえるイギリス人研究者から鋭い質問をされた。国内の学会では得られないであろう鋭い質問であった。事前に想定していた質問だったので、準備していた文章で安心して回答することができた。

その他

アメリカ人は社交的であった。会期中に行われたいくつかの社交イベントにおいて、私が一人だと必ず声をかけてきてくれた。国内の学会ではあり得ないことである。国内の学会ももっと社交的な雰囲気になればいいのにと考えた。

23 日には医療意思決定分析に関する教育的なプログラムが開催された。国内でこの領域に関する教育的なプログラムが開催されることはほとんどないので、この領域を体系的に包括的に理解するのに非常に役立った。

23 日の昼休みにはメンターシッププログラムが行われた。事前に希望していたオランダ・エラスムス大学のハニク教授とマンツーマンでのメンターシップという、またとない貴重な機会に恵まれた。ハニク教授は医療意思決定分析に関する世界的に著名な教科書の著者であり、SMDM の初代会長である。ハニク教授と昼食を共にしながら、決断分析のみならず医療経済の分野でヨーロッパに留学するなら誰がよいかを相談した。教授はさらに英語力を高めることを条件に、後日いくつかの候補者を提示してくださることを約束してくれた。

25 日の私の研究発表のあとに、前日のパーティで知り合った研究者の上司の方が私の研究に非常に興味を持ってくれた。その上司はカナダ癌研究センターの薬剤経済学分野の部長であった。早速その日のうちに私に E メールを送ってきて、私の研究内容に質問をしてくれた。

自らの研究の発表の場として、また各国の研究者との交流をする場として、国際学会に参加したことが大変いい刺激となりました。

最後になりましたが、今回の国際会議派遣に際し助成をして頂き、京都大学教育研究振興財団に厚く御礼申し上げます。